

悲しみを分かち合う

谷川海正

近況

今年も八月五日より二二日まで、お盆の棚経を行っておりました。市内全域から仙台地区まで、途中施餓鬼会をなさみながら約二週間かけてお檀家さん宅まで参上しました。震災の年も困難な状況ではありましたが例年通り行い、仮設住宅や借り上げ住宅へも参上しておりました。

今年大きく変わった事は、仮設住宅へ参上できた棚経は一件のみだったことです。二年ほど前から徐々に新しい住居を建てたり公営復興住宅へ移っておりましたが、やっと落ち着いた生活が送れることが出来るようになりました。積極的な原因で新住居へ移ることが出来れば良いのですが、仮設住宅の集約化や入居期限の問題も背景にはあるようです。

また当山では、八月一九日の施餓鬼会に併せて「東日本大震災犠牲者諸霊供養塔」を建立しました。予てから、供養塔建立の思いはありましたが、段取りの遅い自身の悪い癖により建立が遅くなってしまいました。

供養塔表には「東日本大震災犠牲者諸霊供養塔」、裏面には震災犠牲者諸霊供養和讃と当山で亡くなられたお檀家五二名の名前（法名ではなく生前の名前）と年齢、住んでいた地名を刻みました。市内各地区には慰霊碑が建てられています、中には故人の名前を刻んで欲しくないと言う事例もありました。ですので、名前を刻むにあたっては、

御遺族に確認し了承を得てから刻んでおります。

そして、供養塔には地元で採石できる「井内石」を使用しました。自然災害で亡くなられた諸霊を供養する為の石でしたので出来るだけ天然の切出した状態で使用したいと考え、時間がかかりましたが幸いにもちょうど良い状態の石が採れました。

石の特徴としては、年数を刻んでも風化作用がほとんど見られず刻んだ文字も同様に明瞭に読み取れると言う特徴があります。

本堂正面左側にあり、奇しくも亡くなられた諸霊が、供養塔を建立する事により寺を訪れる人たちの記憶に残り、また大きな災害が永く伝承されて行くように願っております。

復興と言葉

「復興、復興と言葉を聞くと、どんどん忘れ去られてしまいそうで辛くなります」当山檀徒の言葉です。親、兄弟、甥の三名が行方不明となり、震災後三ヶ月を経過したころ来山し未だ家族が見つかっていない事を伝えにきました。「身元が確認できるまでは、家族の葬儀を行う気持ちにはなれない」とのことでしたので、急ぐことはないの
で確認が出来るまで待ちましょうと伝えました。当時その方の心中には、未だどこかで家族が生存しているかも知れないと言う気持ちがあったと思います。

当時は、ライフラインも復旧しボランティアで大勢の人たちが訪れ瓦礫の撤去や街中の清掃が進みだした頃でした。まだ先の見えない大変な時期でしたが、多くの人たちの善意のお陰で住んでいる私達もなんとか進んで行こうと言う気持ちになっていました。

テレビやラジオでもボランティア活動や、被災者支援のNPOの復興に向けた活動の様子を頻繁に報道しており、

「一日も早い復興を」と言う言葉が多く聞こえましたし、私自身も同じ言葉を何かある度に使っていました。

そしてお寺では、震災で亡くなられたお檀家の葬儀やボランティアの受け入れ、お檀家の被災状況の確認など慌ただしい日が続く中、私の中で慣れが生じていたのでしょうか。

「復興と言う言葉を聞くと……辛くなります」と言われた時、大切なものを失い、かけがえのない家族を失った人たちの気持ちを置き去りにしていたのではないか、寄り添っていなかったのではないかと気づかされた瞬間でした。たとえ街が「復興」しても、亡くなられた方の命が戻る事はないのですから。

以来、「復興」と言う言葉は使わないようになり、遺族とは気持ちが落ち着くまでゆっくり時間をかけて接する様に勤めました。

震災に関する事に臨む時には、この言葉を思い起こすように心がけています。

悲しい記憶、けど残したい

石巻では、市内中心部を流れる北上川周辺を会場に毎年八月一日「川開きまつり」が開催されております。この祭りは、北上川の改修工事を行った川村孫兵衛翁の供養とまた、北上川で亡くなられた水難者の供養を目的に開催。

それに併せて当寺が所属する石巻仏教会では、川施餓鬼供養祭を担当しております。毎年各宗派の当番寺院によるご詠歌・和讃が奉唱される中、川で亡くなられた水難諸霊の回向が行われております。この祭りは、震災の年も規模を縮小しながらも執り行い、特に川施餓鬼では震災で亡くなられた諸霊を供養する為に大勢の市民が訪れます。

当寺では、平成二五年に当番が廻ってまいりました。震災から二年が経過し、お檀家も少し落ち着いてきた頃でしたので当番を引き受ける事を決定。当寺には、代々伝わる和讃があり、いつもならその和讃を奉唱する所でした。しかし、予てより震災で津波が発生し多くの方が奇しくも命を落とした悲しい出来事を何かの形で残せないものか考え

ていた所でしたのでこれを機に、新たに震災供養和讃を作る事としました。

歌詞は、和讃講中の方と私とでそれぞれに考え、「故郷」「同悲」「讚歎」「教訣」「大慈大悲」をテーマに五編の新しい和讃を作りました。

「故郷」 人々の 想い集まる此の郷に 黒き大波襲いかかるる

南無妙法蓮華經

「同悲」 夢か幻 眼の前に 流れ溢れる 涙こらえず

南無妙法蓮華經

「讚歎」 その人の 護りし緑の この郷は 源遙かに流れ久しく

南無妙法蓮華經

「教訣」 生死の海を 渡さんと 唱え祈りし 妙の御法を

南無妙法蓮華經

「大慈大悲」 願いて止まず もろ人を 上なき道へ導き入れむ

南無妙法蓮華經

『あの日大地震が発生し、私達が愛する郷土に漆黒の大波が襲いかかり、それまでの暮らしや思い出、当たり前の幸せをなぎ倒し奪い去って行きました。』

私達は、荒ぶる自然の力に恐怖し、なす術もなくその光景を前にただただ涙を流すだけでした。しかし振り返ればこの郷土は、犠牲となった多くの人々が一生懸命に護り築き上げてきた緑豊かな郷土であります。それはあたかも、源を遙かに遠く発する大河のように豊かで、淀みのない流れのようなものであります。その流れを止めないように。残された私達は、あなた達の思いを胸に刻み進んで行かなければなりません。しかし、どんな時でもあなた達を妙な教えとお題目によって祈り続けます。そしてそこには、私達を救い続ける仏様が、無上の道に導き入れる為に常に手を差し伸べております。』

和讃練習は、その年の五月から毎週水曜日に行い中には親を亡くしたり、家を失ったりする方もおり、当初は和讃

を唱い終るたびに涙を流す姿も見られました。和讃の内容が多少きつかったかと思いましたが、毎回三〇人ほどで唱えて行くうちにその悲しみを分かち合うことが出来た、それぞれが抱えていた震災への想いを共有する機会が生まれたと思いました。

お祭り当日は、朝から曇天模様で川施餓鬼が行われる時間には雨粒が落ち始めて来ました。しかし亡くなった諸霊への供養の想いが通じたのかその後雨はふる事なく、大勢の市民がお焼香に訪れるなかで寄り添うように和讃を奉唱する事が出来ました。以来寺の行事や、三月一日に行う法要にて奉唱する様にしており、本年三月に行った東北教区主催の震災第七回忌法要にても奉唱する事ができ檀信徒共に和讃を作って良かったと感じている。後世に伝承され、唱い続けて欲しいと念願する。

サンテンイチイチ

震災から六年七ヶ月が経過しております。あれだけの辛く悲しい出来事はもう思い出したくないと言う気持ちもあり、「東日本大震災」の記憶が薄れて行く事はごくごく自然な事だと思えます。「風化」が怖いと言う意見もあります。私が一番怖いと感ずるのは「三・一一」と言うような言葉だけで大きく一括りにされてしまう事であり、

「サンテンイチイチ」この言葉に発してしまうほうが覚えやすいし楽なのでしょうが、私の個人的な感覚でどうもこの言葉に違和感を覚えます。三月一日に起きた、東日本大震災。太平洋沿岸東北から関東にかけて広く津波が襲来し、大きい街、小さい街、半島の小さな集落、家押し流しし人の命を奪い去って行きました。福島第一原発の事故によつて避難生活を余儀なくされている人たちが。売れない農作物、成り立たない漁業など多くの問題が含まれています。現在行われている衆議院選挙では、遂に「震災からの復興」と言う言葉はどの政党からも聞こえてこなくなりまし

た。二〇二〇年の東京オリンピック開催を間近に控え「復興五輪」を冠しながら益々東日本大震災の事は報道されな

くなるでしょう。

これは、あくまで個人の想いですので……

まとめ

七月にお盆の準備の際、冒頭のお檀家さんへ久しぶりに連絡を取りました。すると先方もお寺へ連絡しようと思っ
ていたらしく、「ようやくお葬儀をして頂きたいと思っていて」との事。死亡届も昨年提出したそうです。分かりま
したいつでもご相談下さいと伝えました。震災から五年もの間、行方不明のまま待ち続けた家族の気持ちはどのよ
うなものであったか。その間お寺として家族に寄り添っていたのだろうか。また自らに問いかけました。

後日その事を故人と親しくしていたお檀家さんへ伝えた時、私は涙が流れ出るのを止める事が出来ませんでした。
震災から経過した時間は皆同じですが、一人ひとりの感じる時間の流れには違いがあります。本日紹介したお檀家
さんのような人がまだいる事を私達は忘れないようにしなければなりません。